

# 人文知のフロンティア

## ⑦ 仏教と科学の融合



仏教が日本に伝来して約1500年と言われる。当時は最先端の知見の代名詞だった仏教も、時代の流れとともにそうした輝きを失ったかに見える。だが仏教の可能性はくみ尽くしたと言えるのだろうか。今回の研究者は、現代における伝統知の再生を目指している。

京都大こころの未来研究センター

准教授 熊谷誠慈

(仏教哲学)



くまがい・せいじ 1980年広島市生まれ。京都大文学研究科博士課程修了、博士(文学)。専門は仏教哲学(インド・チベット・ブータン)、ボン教研究。2011年京都大白眉センター特定助教。13年同センターの未来研究センター特定准教授。20年より現職。18年ウィーン大客員教授兼任。主要著書に「ブータン 国民の幸せをめざす王国」(創元社、17年)など。

京都荒川区など、幸福行政を進める100近くの自治体が自治体連合「幸せリーグ」を組織している。幸福立国として有名なブータンであるが、同国は仏教国としても名高い。国のあらゆるところに仏教が根づいて機能しており、仏教が不要だという人に出会うことは少ない。他方、日本では仏教に対してネガティブな意見を聞くことが多い。もちろん個別のお寺や僧侶に限定すれば、うまく機能している場合もあるが、全体としては効率的に機能していない。その原因は何なのか。

一つは、寺院経営の困難さであろう。「坊主丸儲け」、「高額のお布施」といったイメージを持ちがちだが、実際には寺院の約4割は年収300万円以下であり、世帯平均年収(約550万円)からすれば格段に収入が低い。お寺の経営に追われる僧侶たちが、ゆとりをもって勉強や修行に専念し、質の高い仏教活動を実施するのは容易ではない。これは国や民間からのサポートの手厚いブータンの仏教界とは状況が異なる。

実践しやすいシンプルな形式で世俗倫理を提示し、行動も見え化をしていくなどの試みも大切であろう。また、西谷は、仏教を歴史的な客体的視点から見るとともに、自身自身がその歴史の一部として生きているという実践的な主体的視点が必要だとしている。そのような視点を持つことができれば、仏教の未来像も具体化しやすくなる。現在の仏教文献学が一番貢献できるのはこの側面かもしれない。

さらに、近代社会が自然科学に大きく依拠している以上、仏教も自然科学的な視点を保持していく必要がある。この点はとりわけ難しく、仏教は、しばしば非科学的な迷信のような扱いを受けてしまう。

しかし、仏教教義を細かくと、近代科学が未だ扱っていない(あるいは扱えない)側面も多く見いだせる。仏教は近代科学と必ずしも相反するものではなく、むしろ両者を相互補完的に融合することで、大きな社会還元をもたらす可能性もある。

現在、筆者の研究グループは、伝統とサイエンスの融合を通じて、安寧と活力が共存する社会の実現を目指している。今年3月には、仏教経典を人工知能に機械学習をさせて、一般ユーザーのお悩み相談ができる「ブツダボット」という仏教対話AIを公表した。

また、伝統知と認知科学、人工知能、最先端コンピューティングなどを融合し、人のこころに安寧や活力をもたらす「サイキ・ナビゲーション・システム」という新たなテクノロジーを開発中である。最先端科学に伝統を加えてみると、これまでとは異なるテクノロジーが育ちそうな予感がしている。伝統や人文は不要だと言われがちだが、意外と、それらが新たなイノベーションを創発する触媒なのかもしれない。

コロナ禍では多くの人の心が疲弊し、長期的なケアが必要であろう。そうした方々のこころを少しでも癒やしたり、希望を与えたりすることができるよう伝統知テクノロジーに仕上げていきたい。

毎月第4水曜に掲載します

2015年の国連総会で採択された持続可能な開発目標(SDGs)は、わが国にも少しずつ定着し、企業や学校などでもSDGsの取り組みが行われている。SDGsは、17の目標と、169の達成基準から成る指標であるが、似たような指標をもとにした幸福政策を実施してきた国がある。それはブータン王国だ。

ブータンは、国民総幸福(GNH)という概念にもとづいて全ての国家政策を進めている。GNHは、4つの柱、9つの領域、33の尺度、さらに100を超える副尺度など、細かく組織立った定量的尺度をともなう幸福政策である。GNH委員会が中心となり、全ての政策がGNHに合致するかを判断している。

このGNHは、日本の自治体行政にも大きな影響を与えている。いち早くGNHを応用したGAH(荒川区民総幸福度)を区政の柱とする東

## 伝統知を触媒に「幸福」育む

わが国の仏教寺院は、江戸時代には行政機能を持ち、教育、文化の発信拠点として地域コミュニティの中核であったが、明治以降、行政機能は役所に、教育機能は公教育に、そして、文化的機能はさまざまな文化・娯楽に取って代わられた。さらに、人口が流動的になるにつれて、固定的な地域コミュニティのハブ機能も失われつつある。

経済面でも社会的意義の点でも衰退し続ける日本仏教に、復活のチャンスはあるのだろうか。哲学者の西谷啓治は、「仏教について」という講演録の中で、仏教復興のために必要な要素として、社会倫理、歴史性、科学性の3つを挙げている。

西谷は、仏教が社会倫理として、一般社会の人々の生活を支えるような力を備える必要があると主張している。しばしば「分りにくい」と言われがちの仏教だが、世の人々が

ブータンの祭りで掲げられた仏画。日本仏教の可能性を考える上でブータンに学ぶことは多い(熊谷さん撮影)